

5. 《男神が多い武蔵国》

8世紀頃、地球温暖期を迎え、西欧も東洋も開墾が盛んとなり、食物生産を押し上げました。そして文明が、古代から中世へ移行。この時代の特徴が、国際宗教（注1）の誕生です。宗教が国際化できるほど、広範囲に生産力が向上したことを示唆しています。

中国では、隋・唐が国家を再統一し、仏教治国政策が行われます。日本は、中国に学び、豪族たちの氏神を日本神話の体系に位置付け、氏神に冠位を与えてそれに応じた供物を与える仕組みとし、また仏教治国政策も取り入れ、全国に国分寺を立てました。

では辺境の武蔵国（注2）では、どのような状況だったのでしょうか？

国司は、大国魂神社敷地（東京都府中市）に置かれ、有力豪族の氏神を順番に詣りました。それは豪族の所有地の調査も兼ねてのことだったでしょう。その順番が一之宮等の神社のランクになったといわれています。（注3）

武蔵国の神様で特徴的なことは、開墾開拓に相応しい“力の男神”が圧倒的に多いということです。

なお神田明神は、奈良時代中頃に創建されていますが、ランク外であるのは、伊勢神宮直轄地であり、国司の管轄外だったからだと考えます。

さらに仏教治国政策による国分寺は、東京都国分寺市に建立されています。その前の733年（天平5）には、深大寺（東京都調布市）が創建（伝）されていますので、このころ武蔵国でも仏教が勢力を拡大したことが伺えます。

さて、ずっと後世になると神社のランクが変わります。氷川神社が一之宮に、金鑽（かなさな）神社が二之宮にランクアップしました。つまり、流域単位で見ると、多摩川流域と比較して荒川・利根川流域が力を増したことを示唆しています。ちなみに、鶴見川流域は、杉山神社を信奉する一族が開墾しています。

注1：キリスト教、イスラム教、仏教

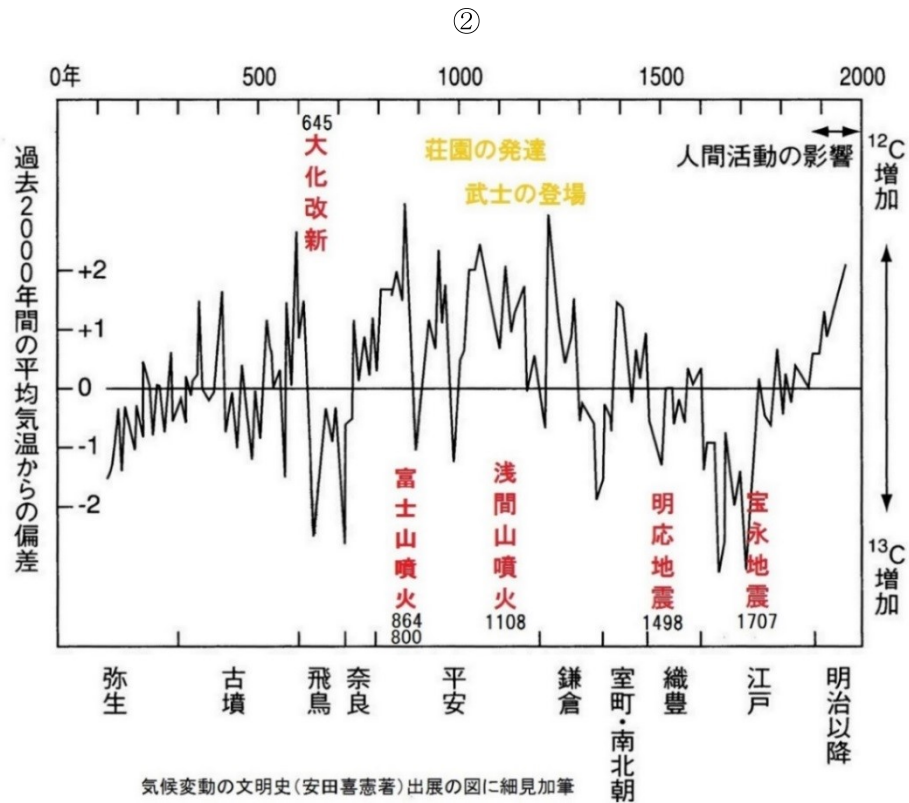
注2：奈良時代、東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道の7街道が整備され、この道を使って全国から税金（租庸調）を集めていました。武蔵国は、初めは東山道に属する国でしたが、後に東海道に変わりました。

注3：武蔵国の神社ランク（写真③）

写真は、①武蔵国の神社ランク、②歴史気温変動、③神社と寺院の概略位置（細見作成）

①

ランク	名前	流域	主祭神
総 社	大國魂大神	多摩川流域	男神 オオクニヌシ
一之宮	小野神社	多摩川流域	男神 天ノ下春命
二之宮	小河神社	多摩川流域	男神 国常立尊 (くにとこたち)
三之宮	氷川神社	荒川・利根川流域	男神 スサノウ
四之宮	秩父神社	荒川流域	男神 八意思兼命 (やごころおもいかね)
五之宮	金鑽(かぶ)神社	利根川流域	女神 天照大神
六之宮	杉山神社	鶴見川流域	男神 イソタケル
参考	神田明神	荒川・利根川流域	男神 オオナムチ



③

